

教宣 せぶん

奇跡の逆転勝利

スポーツの秋ですが、スポーツの世界では信じられないような逆転勝ちが稀に起こります。先日のソフトバンク対ロッテのリーグ優勝決定シリーズの第3戦もそうでした。ロッテ4点リードで迎えた9回裏、この回を抑えれば、ロッテのリーグ優勝が決まるという場面で、ソフトバンクが4点差を追いつき、延長戦でサヨナラ勝ちを収めてしまいました。結局、この優勝決定シリーズをものにしたのはロッテでしたが、ソフトバンクの土壇場からの盛り返しは記憶に新しいところです。

高校球児だった私にも逆転勝ちの経験があります。9回表まで0-3でしたが、9回裏に4点を取ってサヨナラ勝ちを収めました。劇的な勝利だっただけに、この時の記憶は鮮明に残っているのですが、9回裏の攻撃を迎えた時のベンチの中は敗色濃厚で、ほとんどの者が負けを覚悟していたと言って良いでしょう。「ベンチにいる全員がゲームセットの声を聞くまで、勝利を疑わず、あきらめなかった」などという美談の世界とは程遠いものでした。そんなあきらめムードが漂う中、あきらめていない一握りの選手たちがいました。それはこれからバッターボックスへ向かう選手たちです。あきらめていないという言葉は正確ではなく、「出塁する」という自分の役割を果たそうと無心になっていると言った方が適切なのかもしれません。その仲間が、「出塁する」という自分の役目をきっちり果たし、後の打者へとつないでいきます。チャンスが広がっていくうちに、あきらめていた仲間が少しずつその気になっていきます。1点・1点と点が入っていくにつれて、逆転勝利を信じる輪の中にあきらめかけていた者が一人・一人と入ってきました。そして、同点になった時には、ベンチは最高の盛り上がりを見せ、初めて「いける」と全員がひとつになりました。そこから最後の1点を取るのとはそれほど難しいことではありませんでした。

いま、私たちが置かれている環境も決して「美談の世界」ではありません。だからこそ私たちが先頭バッターになりましょう。出塁して、チャンスをつくりましょう。私たちがチャンスを広げれば、あきらめている仲間もきっと輪の中に入ってくるはずです。同点に追いつく時がいつなのかはわかりませんが、その時は全員の気持ちはひとつになり、勝利は目の前にはあるはずですよ。